

七寺本『清浄法行經』の「翻刻」と「訓讀」をめぐる

——翻刻と訓讀の試み——

野村 卓 美

一 はじめに

中国で創作された『清浄法行經』（以下、『法行經』と略記）は、「三聖派遣説」を説く疑經（偽經、疑偽經、擬經とも）として、古来から知られているが、早い時期に散逸したとされていた。しかし、近年、名古屋長福寺（通称七寺）で写本が発見された。冒頭部に欠落が存するものの、その全容を知ることが出来るようになった。発見直後から、多方面にわたり積極的に、同經の考察を試みたのは石橋成康氏である。その成果は、「新出七寺藏『清浄法行經』攷」『東方宗教』第七八号（一九九一年十一月）。以下、本稿では「石橋Ⅰ」と略記、「新出七寺藏『清浄法行經』攷之二——疑經成立過程における一断面

——」『佛教文化研究』第三七号（一九九二年九月）。以下、本稿では「石橋Ⅱ」と略記¹⁾の二論稿に纏められている。氏の二論稿は、同經を様々な角度から解明することを目指しており、数多くの有益な示唆がなされている。氏が最初に試みたことは、正確な翻刻文・訓讀文の作成であったことは、両論稿を一読すれば理解されるところである。一九九六年に『七寺古逸經典研究叢書 第二卷』（註（Ⅰ）が刊行され、石橋成康・直海玄哲・落合俊典諸氏「擔當」の影印・翻刻・訓讀・解題（以下、本稿では「影印」・「翻刻」・「訓讀」と略記）が収められている。同叢書の刊行を機に、『法行經』に関する多くの論稿が発表されて来ている。

七寺本『法行經』は「對照本のない唯一現存が確認さ

れる寫本⁽²⁾」であるにもかかわらず、「石橋Ⅰ」・「石橋Ⅱ」

の翻刻・訓読と「翻刻」・「訓讀」を比較すると、微妙な差異が見出せる。このことはまた、最も関心を集めている「三聖派遣説」を説く十余行の短い記述の経文も、「影印」を参照し翻刻・訓読が試みられているが、詳細に比較すると、ここでも研究者により微妙な相違が存する。このことも本經の研究を遅らせているのではなからうか。微細な翻刻・訓読の相違が生まれる原因の一つは、梁曉虹氏が指摘する、同写本に「文字の誤読・誤字・異体字・古字等の現象が大量に存在⁽³⁾」することにあると思われる。写本からは「末筆のはね方などに平安写経獨特の筆法を見ることができる」（石橋Ⅰ）との指摘があり、日本で書写されたことがわかる。梁氏の指摘する誤写・誤読、または、誤字は我が国で転写された際に生じた場合も少なくないのではなからうか。また、幾箇所かは、写本の文字が誤読されている場合も存するようである。それらの一部については既に論じた⁽⁴⁾。

本稿でも、同様な例を幾つか指摘し、「翻刻」・「訓讀」について、少し検討を加えてみる。性急に結論を求め過ぎた故、未だ十分なる考察がなされていないことを危惧する。是非とも諸賢の批正を賜りたい。

二 「清浄ならざる行い」第四条の

翻刻・訓読の試み

『法行經』全体は「清浄なる法行」・「清浄ならざる行い」各二十條を対比して記された第一段と、佛教の受容を拒む中国に釈迦が三人の聖を遣わしたという、所謂「三聖派遣説」等を説く第二段とで構成されていることは、「石橋Ⅰ」に指摘がある。先稿では、「清浄ならざる行い」第二・十・十三・十七・十八條の訓読や翻刻を検討した⁽⁵⁾。第四条と第八条に関しては、投稿後に気付いた故、ここに記してみる。

第四条は、

四者、持佛尊像、或安屋頭檐下、或屋苦邊⁽¹⁾。日炙脆裂、雨漏爛懷。或安竈下烟熏⁽²⁾、幡蓋形像梨黑。

(41～43行)

* 句読点は「訓讀」参照。以下、注記なき場合は同じ。

* (イ)「、」(石橋Ⅰ)。(ロ)「重」(石橋Ⅰ)。

と「翻刻」され、

四は、佛の尊像を持つに、或は屋頭檐下、或は屋苦

邊に安んず。日に炙け脆く裂して、雨漏れて爛懷す。
或は竈下の烟熏に安んじ、幃蓋形像は梨黒たり。

と「訓讀」されている。

「影印」を参照すると、43行の「烟・熏」の「烟」は火偏で旁は「叵」と書写されている。この字は「煙」の「俗字」（『広漢和辞典』（大修館書店）である。同写本が「因」を「叵」と書く例は73行に「叵・種」（「因・種」とある。しかし、54行の「烟・熏」と「鰯・刻」されている。「烟」の字は「烟」と判読される。「烟」と「烟」は意味の異なる字（『評点整理本 康熙字典』（漢語大詞典出版社）。以下、『康熙字典』と略記）であるが、「鰯・刻」の如く、「烟」字を意識した誤写と推察される。同写本中には同様の誤写、もしくは、誤読が幾つか見出せる。このような点にも配慮しながら考察する必要がある写本であることは、先稿で言及した⁶⁾。

第四条は「佛尊像」を「安」ずる場所についての戒めを語っている条である。「安」が二度用いられていることに留意し、訓読を試みる必要があるのではなからうか。まず、「屋頭」・「檐下」・「或」は「屋・苦邊」に「安」ずること、次に、「或」は「竈下」に「安」ずることを、その場所が不適切であることを、理由を明確に指摘し戒

めていると解すことが出来る。前者の「屋頭」・「檐下」は辞書や大藏經中に使用例が見出せるが、「屋・苦」、もしくは、「屋・苦邊」は検索できない。しかし、余り多くはないが、外典から「屋・苦」は探し出すことが出来た。以下、それらの幾つかを示してみる。まず、元稹（七七九～八三一年）の『元氏長慶集』卷十「酬翰林白學士代書一百韻 并序」には、「仰竹藤纏屋・苦苑荻補籬」〔南人以大竹爲瓦用荻爲籬也〕（『文淵閣四庫全書』一〇七九・四〇二頁下）とある。引用文中の【】は注記である。「苦」には「玉篇」…以草覆屋。（『康熙字典』、「おほふ。」）（『大漢和辞典』）の意があり、注記を参照すると、これは南方の人たちの大竹を瓦の代用とする屋、身近な苑荻を用いて葺かれた籬の様の描写と解せる。また、南宋・陸游著『入蜀記』卷三、乾道六年（一一七〇）九月には、「九日。早、謁后土祠。道旁民屋、苦茅皆厚尺餘、整潔無一枝亂。」（『文淵閣四庫全書』四六〇・九一〇頁上）との記述がある。ここも民屋が茅で整然と覆われた様の描写である。この二例は熟語ではない。次は、『御製詩集』三集卷九「程嘉燧芭蕉書屋図」に「結屋・苦黃草倚楹眇綠天」（『文淵閣四庫全書』一三〇五・四一五頁上）とある。明代の詩人・歌人である程嘉燧（一五六五～一六四三年）の

書屋を詠じた詩であるが、「結屋」には「屋舎を構築する。」（『漢語大詞典』）の意があり、それが「黄草」（『小鮒草の別称』・蓬の別称）（『漢語大詞典』）で覆われている様を詠じていると解せる。この用例も、先の二例と同様に熟語と見做すことは出来ない。最後に、明代の陸楫（一五一五～五二年）撰『古今說海』卷八十五『海陵三仙傳闕名』に「賓至以水酌茗。或擷屋苦、煮水以啜、其甘如飴。」（『文淵閣四庫全書』八八五・五五〇頁上）とある例が見出せた。ここは「屋苦を擷み」、それを「煮る」と「其の甘きこと飴の如し。」と訓読できるのではなからうか。「苦」には「類篇」青苦、藥草。」（『康熙字典』）の意もあり、「煮」という記述とも矛盾しない。「屋苦」との熟語は見出せない故、ここでは「屋根に自生している苦」の意で使用されているのであろうか。或いは、「屋苦邊」はそのような場所を指しているのではなからうか。この箇所は用例の博搜と同時に、誤読・誤写の可能性も配慮し再考が必要であらう。先述した如く、本条は「佛尊像」を「安」ずる場所を問題としている。「屋頭・檐下」に安置された「佛尊像」が直射日光で「日炙」の状態になることを、「屋苦邊」のそれが「雨漏」（写本は「漏」）になることを戒めていると読める。

「苦」には「通鑑」…被苦而耕。胡三省註…被苦於身以蔽雨也。」（『康熙字典』）との注記も見出せ、「苦」は雨を防ぐための材料であり、「雨漏」との表現との関連が推察出来る。また、「苦屋」（屋根を苦で葺いた家）（『大漢和辞典』）・「苦宇」（草廬）（『漢語大詞典』）等の近似した熟語を見出すことも出来る。再度、考察を試みたい。

次に、「日炙脆裂」の箇所を検討する。「日炙」との表現は大藏經にも頻出するが、「脆裂」は辞書類や大藏經からも見出せない。外典からは次のような使用例を見出した。宋代・梅堯臣（一〇〇二～一〇六二年）撰『宛陵集』卷五十『王原叔内翰宅觀山水図』に、「古絹脆裂再黏續、氣象一似高高嵩。」（『文淵閣四庫全書』一〇九九・三六四頁上）とある。「日炙」・「脆裂」という熟語が存していたことが解る。

次は、「雨漏爛懷⁸」との記述を検討する。「爛懷」の「懷」は「鰾刻」の如く立心篇で書かれている。写本中の立心篇については先稿でも検討した（註（4））が、「懷」は「又懷抱、胸臆也。」・「又傷也。」（『康熙字典』）の意であり、「ただれる。」・「ただらす。」（『大漢和辞典』）の意のある「爛」と結び付いた熟語は見出せない。「壞」は『集韻』音懷。壞墮」（『康熙字典』）とあり、発音は

同じであるが、意は明確に異なっており、「懷」は「壞」の誤写と解すべきではなからうか。「爛壞」は「ただれやぶれる。朽ちただれる。」（『大漢和辞典』）の意である。經典類からも、

・披僧伽𦘔既出。各分置於露處。令雨爛壞。（根本説

一切有部尼陀那」卷第四（『正藏』八・四三二頁上）。・開一房門。見僧臥具在露地雨濕爛壞。（『十誦律』卷

第十（『正藏』二三・七七頁上）。と、

『法行經』と同様に、雨を原因とする湿気で「爛壞」とすると説いている。

最後に、第四条の訓読を試みる。先述した如く、「安」が二度用いられていることに留意すべきであろう。即ち、「佛尊像」の「安」ずる場所として、「屋頭」・「檐下」、「或」は「屋苦邊」の場合と、「竈下」の場合に分けて論じている。前者の場合が「脆裂」・「爛壞」することを、後者が「烟熏」・「梨黒」となることを戒めているのではなからうか。梁氏は「同時期の翻訳經典の四字と比較すると、『清淨法行經』は明確に流暢・自然」、または、「正確に句読点を付けること」（註（3））の重要性を指摘している。これを参照すると、「四者、持佛尊像、或安屋頭檐下、或屋苦邊、日炙脆裂、雨漏爛壞。或安竈下、

烟熏幡蓋、形像梨黒。」と句読点の位置と「懷」を「壞」と改め、「四は、佛尊像を持つに、或は屋頭・檐下、或は屋苦邊に安じ、日炙し脆裂し、雨漏し爛壞す。或は竈下に安じ、幡蓋を烟熏し、形像は梨黒たり。」と訓読するのは如何であろうか。

三 「清淨ならざる行い」第八条の翻刻と訓読の試み

第八条の「翻刻」は、

八者、亦、不懸幡繪綵繖蓋。

（46行）

*（ハ）「亦不」（石橋Ⅰ）。（三）「増」（石橋Ⅰ・Ⅱ）。

とあり、「訓讀」は、

八は、亦、幡繪綵繖蓋を懸けず。

とある。この「訓讀」の「幡繪綵繖蓋」という漢字五字が連続している箇所は如何に訓むのであろうか。「石橋Ⅱ」では「八は、亦、幡繪・綵繖蓋を懸けず。」と訓読されている。「訓讀」も同様の訓みが意識されているのであろう。しかし、この訓読は無理があるのではなからうか。以下、少し検討してみる。

先ず、「幡繪」なる熟語が辞典類から見出だせないことが挙げられる。大蔵經から用例を探すと、例えば、

「起諸幢幡・繪・綵花蓋。」(『修行本起經』卷上(『正藏』三・四六頁下))、「若以華・香・瓔珞・幢幡・繪蓋・香油・酥^(イ)・燈・供養經卷。」(『妙法蓮華經』卷第五(『正藏』九・四五頁中))、「幢幡・繪・綵」(『正法華經』卷第二(『同』・七七頁下))の如くであり、熟語としては用いられていないようである。また、「綵繖」も辞書に見出せないが、大藏經では唯一「佛說灌頂呪宮宅神王守護左右經」巻第五の「綵傘・覆蓋安淨潔處。」の傍線部は異本に「綵繖」(『正藏』二二・五一頁中・脚注)と見出せるが、これも頻用される語彙ではなかったようである。「綵繖蓋」との用例は大藏經から検索出来ない。このような理由より、「石橋Ⅱ」の訓読も直ちに首肯できないようである。

この第八条の訓読で参照すべきは、表現が近似する「清浄ならざる行い」第十五条ではなからうか。それは、十五、亦、不焼香燃燈。

と「翻刻」され、

十五は、亦、焼香燃燈せず。

と「訓讀」されている(「石橋Ⅰ・Ⅱ」も読点を除いては同じ)。これに準じ、第八条も「亦、懸幡・繪綵・繖蓋せず。」と訓読しては如何であらうか。「懸幡」は「佛語」。

幡(のぼり)を立てること。佛供養の一つに数えられる。〔『日本国語大辞典』(小学館)、〕「繪綵」は「色どったきぬ。」〔『漢語大辞典』・『大漢和辞典』〕、「繖蓋」は「きぬがさ。衣笠。」(『同』)と、辞書類からも見出すことが出来る。また、これらは、

・ 豎幡竿^(イ) 頭懸幡。幡脚所指方處。一切衆生十惡五逆四重罪等。皆悉^(イナ)得消滅。(『尊勝佛頂真言修瑜伽儀軌』巻下(『正藏』一九・三八三頁中))。
・ 焼種種香。以種種繪・綵・種種幡幢莊嚴其處。(『佛說藥師如來本願經』(『正藏』一四・四〇三頁上))。

・ 好函盛之繖蓋覆上。諸神宮衛惡魔退散。(『佛說灌頂七萬二千神王護比丘呪經』(『正藏』二二・五一六頁上))。

と用例を見出だすことが出来、罪障消滅・莊嚴・惡魔退散等の目的で設置されるものであることがわかる。

上述した如く、「清浄ならざる行い」第八条は「懸幡・繪綵・繖蓋せず。」と中点を付して訓読し、佛前・仏殿等の莊嚴を怠る行為を批判している条と解すべきであらう。

四 「翻刻」された文字の検討

七寺本写本の「翻刻」作成の際に誤読され、それに基

づいて「訓讀」が試みられた箇所がある。これも、『法行經』の正確な理解を妨げている原因の一つである。そのような例は先稿（註（4））でも指摘したが、以下、新しく気付いた箇所を幾つか検討してみる。

『法行經』は第一段と第二段で構成されていることは既に述べた。その第二段の冒頭は以下の如く始まる。その部分は、

阿難勤教化。便爲善奉修法行二十善事。勿使缺減、勤復勤之、載得免罪。勿爲懈怠、口與意違。^{（ホ）}不相開化、奉行不倦、汝爲具足、報佛息已。^{（ヘ）}（92～94行）

* 「石橋Ⅱ」とは、句点・読点の相違はあるが、位置は同じ。ここでは、幾つかの文字を検討することを目的としており、煩を避けるためにこれらの注は略す。

* （ホ）「違」（石橋Ⅱ）。（ヘ）「恩」（「鰯刻」注記）

と「鰯刻」され、阿難勤めて教化す。便ち善く法行の二十善事を奉修せんと爲す。缺減せしむ勿く、勤めて復たこれを勤め、ここに免罪を得。懈怠をなすこと勿く、口と意は違ふ。相開化せざれば、行を奉りて倦まず、汝具足を爲せば、佛恩を報ず。

と「訓讀」されている。第二段冒頭に突然阿難の名前が登場するが、この記述から「清浄なる法行」の勧め、「清浄ならざる行い」の戒めを語る二十條は阿難の教化であることが明らかになる。「石橋Ⅱ」は「清浄法行經」が『佛說阿難問事佛吉凶經』などの經典を下敷きに編集され^{（ハ）}ており、同經の如く『法行經』も「阿難説くらく……」と始まっていた^{（ニ）}と推察している。引用部全体の訓読の試みは後日を期したいが、「鰯刻」の中に幾つか再考を要する文字が存しており、それは「訓讀」にも影響すると考えられる。本稿では、その点のみを検討しておく。

先ず、「載得免罪」と「鰯刻」され、「ここに罪を免れることを得るも」（石橋Ⅱ）・「ここに免罪を得」（「訓讀」と訓まれている「載」字について考察してみる。「載」字は22行にも見出せ、「戔」と「車」が明確に書かれている。写本中に「車」は見出せないが、車偏は「轉」（7行）・「輕」（9・41行）、また、「連」（90行）にも「車」字が存する。これらの「車」は明確に書かれている。しかし、この「戔」の左下の字はそれらの「車」とは明らかに異なる。「影印」を参照すると、先の四例の「車」字の第七画目は縦に長く引かれているが、ここで

「車」と判読された字の第七画目の縦線は第一画目の横

線の上にも出ておらず、また、下に長く引かれることも無く、右上に跳ね上げられている。第六画目の横線と推察される下に、下向きの三本の線が見られる。最も左に書かれている線は左下に長く引かれ、右側の線は比較的短い、これも右上に跳ねられている。このような点からも、22行目の「載」とは明らかに異なった字を意識して記されたと判断される。字典で確認するも、「載」とは明確に異なる。「戔」字の左下は、写本の中で探すと、「衣」(41・50行)・「裂」(42行)・「裳」(50行)の「衣」字に近似している。故に、「裁」と書かれているのではと推察される。「裁」は「わづか」と訓み、「才・纔に通ず」(『大漢和辞典』)、「通」(纔)『漢語大詞典』。『康熙字典』にもとある。事実、經典に、

・轉經裁^(イ) 竟。(『高僧傳』卷第十一(『正蔵』五〇・四〇〇頁中))。

・裁^(イ) 得數遍。(『統高僧傳』卷第六(『同』・四七五頁中))。

・至今裁壽百歲初民主有子名珍宝。(『釈迦譜』卷第一(『同』・二頁上))。

・上有人裁得容坐。(『弘贊法華傳』卷第九(『正蔵』五

一・四一頁上))。

の如く、「裁」は異本に「纔」とあり、また、「わづか」と訓読されていたと推察される箇所を見出すことが出来る。故に、ここは「載」を「裁」と改め、「裁得免罪。」と翻刻し、「裁に免罪を得。」と訓読すべきであろう。

次は、「口與意逮。」と「齣刻」され、「口」と意は逮ぶ。」と「訓讀」されている箇所を検討したい。送り仮名より、「逮ぶ」は「およぶ。」(『大漢和辞典』)と訓まれ、「逮、及也。」(『大漢和辞典』・『康熙字典』)の意と解され、「及ぶ」は「ある物、所、時、程度などに達する。」(『日本国語大辞典』)の意である。一方、「石橋Ⅱ」は

「口与意違」と翻刻し、「口と意違わば」と訓読している。この字を「逮ぶ」と解するか、または、「違う」と訓むかで意味が逆になる。写本からは、他に「逮」・「違」字を見出だすことが出来ないが、「逮」と「違」を字典で調査すると、両者は明確に書き分けられていることがわかる。「逮」と「韋」は横線の数に相違があり、概ね、「逮」は上部に三本、「韋」は全体で六本引かれている。写本を見ると、94行の文字は横線が六本あり、その最後の横線は幾分上向きの弧を描くように引かれている。故に、「石橋Ⅱ」の如く、「違」と翻刻すべきである

う。大藏經からも、

・生老病死輪(イ 轉輪) 轉無際事與願違憂悲爲害 (『六度集經』卷第四 (『正藏』三・三三頁上))。

・仕(イ 士) 不得官。願與意(イ 福) 違。(『羅云忍辱經』 (『正藏』一四・七六九頁下))。

・災怪首尾。願與意違非禍縱橫。(『佛說四天王經』 (『正藏』一五・一一八頁下))。

・能與願(イ 相厭) 違者求不得苦也。(『仁王護國般若波羅蜜多經疏』卷下 (『正藏』三三・四九一頁上))。

の如く、「甲與乙違」との文型は見出すことが出来たが、「甲與乙違」との表現は、今回の調査では見出せなかった。故に訓読は、「石橋Ⅱ」の如く、「口と意違わば」と訓んでおく。再度、検討を試みたい。

次に、引用部の最後、「石橋Ⅱ」が「報佛息已。」、「顰刻」が「報佛息已。」とする箇所を検討する。「影印」を参照すると、「自」の下に「心」とあり、「息」と判読できる。同写本には他に「息」字、また、「恩」字も見出せない。「石橋Ⅱ」は「佛を報じて息るのみ」と訓読しているが、文意が解し難い。また、大藏經で検索するも、「報佛息」・「報佛息已。」という表現は見出せない。しかし、「報佛恩已。」は、

・汝如是悉爲報佛恩已。(『道行般若經』卷第十 (『正藏』八・四七七頁下))。

と見出すことが出来る。同じ表現は「同本異譯」(『佛書解説大辞典』(大東出版社))である『大明度經』卷第六 (『正藏』八・五〇八頁上) にも見出せる。当然、「報佛恩」という表現は数多く見出せ、

・利益一切衆生爲念佛恩。爲報佛恩故。(『大方便佛報恩經』卷第七 (『正藏』三・一六六頁上))。

・使三宝不断則報佛恩矣。(『註維摩詰經』卷第二 (『正藏』三八・三四七頁下))。

・一切如来皆悉知汝能報佛恩。(『阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌』 (『正藏』一八・一九二頁上))。

の如くである。「顰刻」の指摘する如く、「息」は「恩」の誤写と推察され、「報佛恩已。」と翻刻し、「訓讀」は「佛恩を報ず。」とあるが、強調の助辞「已」も配慮し、「佛恩に報くうのみ。」と訓むのは如何であろうか。引用した箇所は、句読点の位置も配慮しながら、再度検討する必要があると考える。

「顰刻」で疑問に感じている文字をもう一つ指摘しておく。二十条の「清浄ならざる行い」が語られ、仏法修

行を怠る人々を、梵釋四天王たちが見放し、鬼魔煞鬼が跋扈し、災禍が起こるさまが語られるが、その中に、

室家善闘。无有歡心、子孫不與、多諸弊惡。

(71～72行)

* (ト)「」(石橋Ⅰ)。(チ)「」(石橋Ⅰ)。

と「鰾刻」され、

室家は善く闘す。歡心有ることなく、子孫興らず、諸弊惡多し。

と「訓讀」されている箇所である。「石橋Ⅱ」はこの部分の訓読は試みていない。

ここで検討したいのは、72行の「善」と「鰾刻」されている文字である。この字は他の「善」字と比較すると、少し異なるのではなからうか。写本中に、他に「善」と「鰾刻」されているのは、「善神」(13行・66行)・「二十善」(30～31行)・「善奉修行二十善事」(92行)・「善權」(100行)・「善男子善女子」(113行)の八例である。これらは全て、第一・二画目が片仮名の「ソ」の如く書き始められ、第三・四・五画目の横線が短く、第九画目のそれが左右に大きく引かれている。検討している字は明らかにこれらとは異なる。その相違は、「ソ」字が無く、最上に引かれている横線よりも、上に突き出た縦線が書か

れていることである。先の八例の「善」字は第一・二画目の角状に書かれた線よりも上に伸びた縦線は見出せない。この字を写本中で探すと、「喜・樂」(10行)・「大歡喜」(18・116行)・「歡喜」(79行)とある「喜」字と同じであることがわかる。故に、ここは「室家喜闘」と翻刻すべきであろう。

『法行經』の第一段は各二十條の「清淨なる法行」(第十六条まで、全部、もしくは、一部缺損が存する)と「清淨ならざる行い」とが記されるが、それらの各条は「互いに共通する主題の善惡両面」(前田、註(13))を記すという、「對應關係」(石橋Ⅰ)にあるが、第一段全体も「對應」を意識して構成されており、その発想は『法行經』が引用している『戸迦羅越六方禮經』から得ているのではと推察した(注(11))。この部分と「對應關係」にあるのは、意味や表現から、
室家和令、歡心相向、子孫興盛。
(21行)

と「鰾刻」され、

室家^{ママ}和合し、歡心もて相向い、子孫は興盛たり。

と「訓讀」されている箇所と推察される(「石橋Ⅱ」にこの箇所の訓読なし)。正確な訓読のためには、両者を比較・参照することが有益である。

先ず、「家室」・「室家」とあるが、両者は同意で「夫婦」「家庭」（『大漢和辞典』）の意を表わす。それが「和合」し、「歡心」（心に満足に思ふ）（『同前』）して「相向」うか、「喜鬪」⁽¹⁴⁾し「无有歡心」状態で対応するかで、子孫の繁栄の有無が比較される。両文は句読点の位置も「對應」しているはずである。故に、「家室和合し、歡心相向、子孫興盛。」と句読点を付し、「家室和合し、歡心もて相向い、子孫興盛す。」と訓読、また、「室家喜鬪、无有歡心、子孫不興、多諸弊惡。」と改め、「室家喜鬪し、歡心あることなく、子孫興らず、諸弊惡多し。」と「對應」させて訓読しては如何であろうか。

五 「訓讀」についての疑問

先に、『法行經』第一段は列挙された善・惡を語る二十條が各々「對應」しているのみならず、二十條が語られた後の部分も「對應」を意識して記述されていると述べたが、それが最も顕著に見られるのが、「清淨なる法行」二十條が記された直後の經文と、「清淨ならざる行い」二十条のその部分であろう。例えば、「清淨なる法行」第二十條の直後には、

梵釋四天王・日月五星・二十八宿・諸天神王・虚空

善神・无數官属導従前後、亦皆奉佛、各作功德、朝中暮來禮拜三尊。一切衆邪・魍魎鬼魅、見大尊天威神尊貴、其先重明、皆各走去、無迎人舍。諸天人神、見有供養精進用心奉此法行廿事者、意大歡喜、競來擁護、防備左右、求願與願、不遭衆難。

（12～19行）

*句読点、「石橋Ⅰ」と同じ。

とあり、「清淨ならざる行い」第二十條の直後には、

梵釋四天王・日月五星・二十八宿・諸天神王・虚空善神、不復往來禮拜舍利形像經法衆僧。梵釋四天王一切諸神、咸皆貧志、不來擁護、⁽¹⁵⁾百事不吉。鬼魔殺鬼、一切諸鬼、魍魎妖魅、⁽¹⁶⁾无有禁限。⁽¹⁷⁾

（65～69行）

*（リ）。「。」（石橋Ⅰ）、「。」（石橋Ⅱ）。（又）「。」

（石橋Ⅰ）、「。」（石橋Ⅱ）。

とある。この經典で中心となつて躍動し、罪・福を付与するのは佛・菩薩ではなく、「梵釋四天王・日月五星・二十八宿・諸天神王・虚空善神」・「鬼魔殺鬼・一切諸鬼・魍魎妖魅」という「インドの神々」や「中国的な神々」（石橋Ⅰ）である。これら諸「善神」は、二十條を「敬」えば「來禮拜三尊」するが、「慢」れば「不復往

来礼拝」、また、「奉此法行廿事者」に対しては「諸天人神」は「競來擁護」するが、「不精進」者には「梵釋四天王一切諸神」が「不來擁護」ばかりか、「鬼魔殺鬼、一切諸鬼、魍魎妖魅」が出現するとあり、その対応は全く異なる。先に指摘した如く、經典の編纂者は第一段の構成は、二十條以外の箇所も「對應」を強く意識して記していることが伺える。

この二つの相対立する經文を読んだ後に、共に第二十條の後に、それらの教えを行った、行わなかった結果、すなわち、守った場合、破った場合について、「梵釋四天王・日月五星・二十八宿・諸天神王・虚空善神・無數官属」などの一切諸神、また「魍魎鬼魅」や「鬼魔殺鬼」などの一切衆邪が、どのような反應を示すかを説く部分が附せられている。

(前田。註(13)。

という引用部の解説を読むと、傍線を付した箇所には違和感を覚えるのではなからうか。括弧の部分は經文12・13行からの引用である。「石橋Ⅰ」にも「梵釋四天王・日月五星……虚空善神・無數の官属が導從前後して」(「石橋Ⅱ」もほぼ同文)とある。先ず、違和感を覚えるのは、「無數官属」という表現が「清浄ならざる行い」には省

略されているからである。即ち、諸神が「來拝」する場合には必要で、「不來」の際は不要な記述なのである。次に、「無數官属」の使用例は、

・諸大^(イ)龍王阿須倫王迦楼羅真陀羅摩休勒等。各自與無數官属。來詣佛所禮拜供養。(『無極宝三昧經』卷上(『正藏』一五・五〇七頁中))。

・諸阿須倫王各各復將無數官属。各各持雜華。(『佛說宝如來三昧經』卷上(『同』五一九頁上))。

の如く見出すことが出来る。引用した両經は「異譯」(『佛書解説大辞典』)であるが、阿須倫王(阿修羅(等)とそれに仕える「無數官属」と書かれており、「無數官属」は阿須倫王等と同列に扱われてはいない。即ち、「官属」とは「主要官員の属吏」(『漢語大詞典』)、「正官の属吏」(『大漢和辞典』)の意であり、阿修羅等に仕える役人で、彼達と同等の地位に在るものではない。

次に、「無數官属導從前後」の訓読を検討する。先述した如く、「石橋Ⅰ」は「無數の官属が導從前後して」、「訓讀」は「無數の官属は導從前後して」(「石橋Ⅱ」もと、「導從」が動詞として訓まれている。しかし、

・爾時善住大龍象王。與彼八千諸龍象等。前後導從。意欲還向善住娑羅樹王之林。(『起世因本經』卷第一

〔正蔵〕一・三六八頁下～三六九頁上。〕

・於時群臣即嚴威儀。導從騎乘。〔生經〕卷第三〔正蔵〕三・八八頁下。〕

・駕以金車。前後導從。白瑠璃摩尼宝王以爲其蓋。

〔大方広華嚴經〕卷第二十八〔正蔵〕一〇・七八八頁下。〕

・爾時淨飯王。及諸侍從。至尼俱樹園。下車而入。步衆導從前後圍繞。〔大宝積經〕卷第六十二〔正蔵〕一・三三七頁中。〕

の如き用例を見ると、「導從」は行為を指すのではなく、「さきどもとあとども。前後のともびと。」〔大漢和辞典〕、「古代、帝王・貴族・官僚が他行の折、前驅者を導と称し、後に隨う者を從と称したことにより導從という。」〔漢語大詞典〕と辞書にあり、この意で使用されていると推察される。故に、「官属」と「導從」は、「梵釋四天王・日月五星・二十八宿・諸天神王・虚空善神」の從者であり、先学の試みた訓読の如く、「諸神」と同列の身分のものではないと考えられる。故に、「不復往来礼拝」の場合は彼らには言及されないのである。故に、この箇所は、「梵釋四天王・日月五星・二十八宿・諸天神王・虚空善神、無數官属、導從前後」と読点を改め、

「梵釋四天王・日月五星・二十八宿・諸天神王・虚空善神、無數の官属、導從は前後し」と訓読すべきではなからうか。

次に、「諸天人神、見有供養精進用心奉此法行廿事者、意大歡喜、競來擁護、防備左右、求願與願、不遭衆難。」〔16～19行〕の箇所を検討してみる。ここは、「諸天神、供養精進し用心して此の法行の廿事を奉る者あるを見て、意大いに歡喜して、競い來りて擁護し、左右を防備して、願を求むるものには願を與え、衆難に遭わず。」と「訓讀」されている〔石橋Ⅱ〕も同文。この「訓讀」で解し難い箇所は「見有供養精進用心奉此法行廿事者」の連続する十五字で、句読点が付されていない箇所である。他是全て四字で句読点が付されている。梁氏が、『法行經』は同時期の翻訳經典よりも、流暢・自然に四字で構成されていると指摘していることは既に述べたが、これを参照し、検討してみる。

「影印」を参照すると、多くが一行十七字で構成されているが、この17行は十六字である。勿論、15・23行等は十六字、16・18・21行は十八字であり、一行十七字というのは確たる規範とはされてはいなかったようである。しかし、少し注意してみると、前の16行と比較すると、

17・18・19行の行の冒頭部の文字は明らかに大きく書き始められている。17行が前後の行と文字と位置が揃うのは、最後の四文字あたりである。また、17行には「廿事」との記述が見られるが、「二十者」(8・63行)・「二十八宿」(13・66行)・「二十具」(26行)・「二十善」(30・31行)・「二十惡事」(38行)・「二十」(38行)・「二十惡法」(79・80行)・「二十善事」(92行)と、他の十箇所は全て「二十」と表記されている。何故に、こののみが「廿」と記されているのか。17行は最初幾分大きめの文字で書き始めたが故、十七字(實際は十六字である)で収まらなく、「二十事」とあった写本の文字を「廿事」と改め一行に納めたと推察するのは穿ちすぎであろうか。とすると、「見有供養、精進・用心、奉此法行、二十事者、^(廿)と中点と読点が付せるのではなからうか。

次に、訓読を試みたいが、先述の如く、「諸天人神、供養精進し用心して此の法行の廿事を奉る者あるを見て」と「訓讀」されている。これに拠ると、「諸天人神」が見たものは、二十の「清浄なる法行」を修する者が、「供養」・「精進」・「用心」し「此の法行の廿事を」奉る」さまと解せる。この三語が「奉る」を修飾している。この点を再考すべきと考えるが、後稿を期したい。

最後の箇所である。「意大歡喜、競來擁護、防備左右、求願與願、不遭衆難。」と、四字で構成されており、「意大いに歡喜して、競い來りて擁護し、左右を防備して、願を求むるものには願を與え、衆難に遭わす。」と「訓讀」されている。この箇所も主語は「諸天人神」である。彼らは二十条の「法行」を奉る姿に感動し、「歡喜」・「擁護」・「防備」し、「願」を叶えることにより、「奉此法行、二十事者」が「衆難」に「遭」わないように努力すると解すべきであろう。故に、ここは「奉此法行、二十事者」が「衆難に遭わす。」ではなく、「諸天人神」が「奉此法行、二十事者」を「衆難に遭わしめず。」と訓むべきではなからうか。

最後に、

梵釋四天王・日月五星・二十八宿・諸天神王・虛空善神、無數官属、導從前後。亦皆奉佛、各作功德、朝中暮來、禮拜三尊。^(光)一切衆邪・魍魎鬼魅、見大尊天、威神尊貴、其先重明、皆各走去、無迎人舍。諸天人神、見有供養、精進・用心、奉此法行、廿事者、意大歡喜、競來擁護、防備左右、求願與願、不遭衆難。

と句読点の位置を変更しては如何であろうか。訓読等は

後稿を期したい。

註

- (1) 同稿は「疑經成立過程における一断面——七寺藏『清淨法行經』攷——」と改題し、『中国撰述經典(其之九)』(七寺古逸經典研究叢書 第二卷。大東出版社。一九九六年)に再録。本稿では、『佛教文化研究』掲載の論稿を参照。
- (2) 直海玄哲「清淨法行經」解題(註(1))。
- (3) 梁「從名古屋七寺的阿部疑偽經資料探討疑偽經在漢語史研究中的作用」『普門學報』第十九期(二〇〇三年九月)、後、「從名古屋七寺的阿部古逸經資料探討疑偽經在漢語史研究中的作用」・「清淨法行經」語詞考辨」と改題後、著書『佛教與漢語史研究——以日本資料爲中心——』(南山大學學術叢書。上海古籍出版社。二〇〇八年)再録。
- (4) 野村「七寺本『清淨法行經』の「灑刻」と「訓讀」をめぐって——誤写・誤読と推察される文字の検討——」『文藝論叢』第九十号(二〇一八年三月)。
- (5) 野村「七寺本『清淨法行經』の「灑刻」と「訓讀」をめぐって——「清淨ならざる行い」を中心に——」『文藝論叢』第九一号(二〇一八年十月)。
- (6) 野村「『清淨法行經』の研究——七寺本『清淨法行經』の「翻刻」と「訓読」をめぐって——」『文藝論叢』第八七号(二〇一六年十月)。
- (7) 写本中、竹冠の字としては「箱」が4・47・106行(47行は「箱」)に見出せ、明確に「竹」と判読できる。しかし、48行の「簾」と「灑刻」されている文字は、草冠の如く書かれている。故に、論じている「苦」も「咎」の誤写・誤記の可能性もある。しかし、「咎」は「古代、子供の習字の竹片」(『漢語大詞典』・「むち」・「竹のふだ」)、『大漢和辞典』・「集韻」簡也。』(『康熙字典』)等とあり、この部分の意には適していない。
- (8) 「爛」の字を意図して書かれていると推察されるが、旁は「蘭」と判読される。なお、「爛」は「爛に同じ」。(『大漢和辞典』)。
- (9) 「石橋Ⅰ・Ⅱ」は共に「嬾」と翻刻・訓読する。「影印」で確認すると、検討している文字は、「綵」・「緞」字と同様に明確に糸偏で書かれており、「灑刻」の如く「繪」と判読される。女偏は「如」(29・62・83・84・95行)・「妖」(69・74行)・「姪妹」(81行)。「灑刻」は「姪妹」等の如く、明確に書き分けられている。なお、『康熙字典』に「嬾」は「音増」とあるのみで、意味は記されていないが、『大漢和辞典』には「女のあざな。」とある。
- (10) 『法華經』(下)(岩波文庫。坂本幸男・岩本裕訳注)は「若しくは華・香・瓔珞・幢幡・繪蓋・香油・蘇燈をもって經卷を供養せんをや。」と訓読。次の『正法華經』はこの訓読を参照し中点を付した。
- (11) 「石橋Ⅱ」には、『法行經』が「原型」としたとされる經文の八か所が、『佛說阿難問事佛吉凶經』・『阿難問事

佛吉凶經・『佛說阿難分別經』等と対比されている。同一、或いは、近似する語句は指摘の如く見出すことが出来る。しかし、取り上げられている語句は他の經典類から必ずしも見出だせないものでもない。これらの例のみから、「原型」と速断することは出来ないのではなからうか。

『法行經』の「原型」の經典の一つとして、「石橋Ⅰ・Ⅱ」が指摘する、第一段の「清淨なる法行」・「清淨ならざる行い」各二十条の「對應關係」を着想させたのは、これも同氏が両論稿で「引用」經典として指摘している「尸迦羅越六方禮經」ではなからうか。「原型」の經典としては、最初に同經を指摘すべきであろう。(野村「清淨法行經」の研究——佛說尸迦羅越六方禮經」と「佛說清淨法行經」——「文藝論叢」第八三号(二〇一四年十月) 参照)。

(12) 吳澄淵主編『新編中国書法大字典』(世界図書出版公司北京公司)、伏見冲敬編『書道大字典』(角川書店)等を参照。

(13) 前田繁樹氏は「善權」と「讎刻」されている箇所を「菩薩」と翻刻する(「清淨法行經」と『老子化胡經』——排除のない論議——「中国撰述經典(其之二)」(註(1))。後、著書『初期道教經典の形成』(汲古書院。二〇〇四年) 再録)。

(14) 「喜闢」との熟語は辞書に見出すことは出来ないが、「不樂讀誦經嗜睡多喜闢」・「無有慈愍心小力惡喜闢」(『大方等大集經』卷第五十六(「正藏」一三・三七七頁

中)の如く用いられており、無益な争いを好むことを指しているようである。

(15) 写本には「先」とあるが、意味上から「光」の誤写と推察(註(4) 参照)。

(16) 「貪志(貪恚?)」(石橋Ⅰ・石橋Ⅱ)、「貪恚」(梁。註(3))と翻刻されているが、「忿恚」の誤写と推察(註(4) 参照)。

(17) 「二行平均十七字」(石橋Ⅰ。直海、註(2)とある。

〔付記〕 中国語文献の翻訳は李杰君(元南京大学大学院生の、用例の検索は邱心韻さん(南京大学大学院生)の協力を得た。記してお礼申し上げる。

(二〇一九・一・五)
(南京大学外国語学院日語系)